

令和8年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【大谷口中学校】

①	今年度の目標と学力向上策
重点的に育成する 資質・能力	・各教科における、基礎・基本的な知識・技能の習得。
↓	
実施する学力向上策 【時期・頻度】	・本校のチャレンジカップ(基礎・基本に特化した一問一答テスト)を行う。【年4回(定期テスト前)5教科で実施】 ・本校の学校課題研究をひまえ、各教科において、基礎・基本的な知識・技能の定着と向上のための指導方法の工夫と改善をはかる。【通年を通して取り組み、各学期末に教員間で共有】

⑤	年度末評価	
学力向上策の 実施状況	評価(※)	
↓		
今年度の成果と 次年度の課題		

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果の分析	
特徴的な結果		
↓		
結果から考えられる 児童生徒の実態		

④	さいたま市学習状況調査結果の分析	
特徴的な結果		
↓		
結果から考えられる 児童生徒の実態	①学校全体での取組 ②単元テスト・定期テスト 等の分析・活用	

③	中間評価	
学力向上策の 実施状況	評価(※)	
↓		
学力向上策の 見直し		

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

教育研究所

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【大谷口中学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	当該学年で学習する①漢字の読み書き②計算式③英単語の読み書き④理科・社会の重要語句等を得得させるために、自校のチャレンジカップ、「スタディサプリ」や「ドリルパーク」等のICTを活用した課題の意義・活用方法を学期ごとに再考し、意図的・計画的に提示する。生徒の家庭学習に併せて、各教科の授業内で基礎・基本事項の助言や反復練習の時間を十分に確保し、達成感や成就感を向上させる。年度当初の各教科会にて、前述の指導事項の計画を立案する。
思考・判断・表現	さいたま市学習状況調査「生活習慣に関する調査」における「学級の友達とて話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができているか」の質問において、肯定的な回答をしている生徒は令和5年度、令和6年度、令和7年度と95%と高い数値となっているため、令和8年度の自校の値を維持していくことを課題とする。そのために、課題に対する「評価の観点」を教師が明示し、「指導と評価の一体化」を実現する。「自力解決」と「協働解決」の学習時間を授業内で十分に確保できるように、毎学期の教科会で「深い学びの実現」を図るための手だてを検討する。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	＜学習上の課題＞ 基礎的・基本的な知識・技能の習得状況が目標に達していない。 ＜指導上の課題＞ 各教科の授業内で基礎・基本事項の反復練習の時間を十分に確保できていない。	⇒ 自校のチャレンジカップ(基礎・基本に特化した一問一答テスト)を行う。【年4回(定期テスト前)5教科で実施】 生徒にとってわかりやすい授業のため、授業におけるICTを活用し、ポイントをしぼった授業展開を行う。【毎回】 スタディサプリを活用した宿題を計画的に配信する。【週に1回配信】
思考・判断・表現	＜学習上の課題＞ R7年度さいたま市学習状況調査「生活習慣に関する調査」における「学級の友達とて話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができているか」の質問において、R6年度の自校の値を維持すること。 ＜指導上の課題＞ 「自力解決」と「協働解決」の学習時間を授業内で十分に確保できていない。	⇒ 生徒が課題に取り組む際、評価の観点を教師が明示し、つまずきに対して個に応じたアドバイスを行う。【毎回】 「深い学びの実現」を図り、「自力解決」と「協働解決」の学習時間を授業内で十分に確保する。【毎回】

<小6・中3>(4月～5月)

⑤	評価(※)	学力向上策の実施状況
知識・技能	A	チャレンジカップは年4回定期テスト前に実施することができた。 スタディサプリも学年によって配信方法は異なるが、計画的に配信することができ、基礎・基本事項の反復練習の時間確保の一助とすることができた。 ICTの活用は、使用頻度は確実に増えてきている。校内研修と関わらせながらより効果的な活用につながるよう実践を継続していく。
思考・判断・表現	B	評価の観点を示してから課題に取り組ませること、個に応じたアドバイスを行うことは中間報告以降も意識して実践できている。また、「自力解決」と「協働解決」の時間確保は中間報告以降、より意識して実践してきた。そのため、さいたま市学習状況調査「生活習慣に関する調査」における「学級の友達とて話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができているか」の質問において、肯定的な回答をしている生徒の割合95%を維持できたことも評価できると考える。しかし、より意図的・計画的な「自力解決」と「協働解決」の時間確保を実践していく必要がある。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語では、埼玉県の高得点率と比べると大きな差はなく、無解答率も低い。数学では、埼玉県の高得点率を上回っている問題もある一方で、相対度数の問題で無解答率が高くなっている。 自校のチャレンジカップや授業等で基礎基本の問題に繰り返し取り組んでいる成果が表れ、生徒に定着している部分もあるが、まだ不十分な部分もあることがわかる。これらについて共通理解を図り、チャレンジカップやスタディサプリ等を活用しながら、定着していない部分の練習を反復して取り組ませていく。
思考・判断・表現	国語では、特に「読むこと」「書くこと」に課題が見られ、埼玉県の高得点率を下回るとともに無解答率も30%程度と他の問題よりも高くなっている。数学でも知識・技能を問う問題と比較すると、埼玉県の高得点率を下回っている問題が多く、無解答率も高くなっている。 「読むこと」は全教科の学びの根幹になる部分であり、「書くこと」もどの教科でも必要な力になるため、自力解決と協働解決の時間を授業の中で意図的に確保していく。教科に関係なく「読むこと」の大切さを教師が再認識し、「読む」際にとこつまずきが生じているかを把握しながら授業を展開していく必要がある。

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

③分析共有(児童生徒の実態把握)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	【国語】[数学][社会][理科]の全てにおいて、さいたま市の平均高得点率と比べると課題がある。特に【国語】の「我が国の言語文化に関する事項」、【数学】の「関数」、【社会】の「世界と日本の地域構成」、【理科】の「エネルギーを柱とする領域」ではより課題がみられた。しかし、【国語】の文法や歴史的仮名遣いに関する設問や【理科】の動物のからだに関する設問はさいたま市の平均を上回っている。これは自校で実践しているチャレンジカップやスタディサプリ等で取り組んでいる知識・技能の問題であるため、更に効果的に活用し、今後さらに上昇できるよう支援を行っていく必要がある。
思考・判断・表現	【国語】[数学][社会][理科]の全てにおいて、さいたま市の平均高得点率と比べると課題がある。特に【国語】の「読むこと」、【数学】の「数と式」、【社会】の「世界の様々な地域」、【理科】の「粒子を柱とする領域」ではより課題がみられた。しかし、「学級の友達とて話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができているか」の質問において、すべての学年でさいたま市の肯定的な回答を上回り、95%以上の数値となっている。これは「自力解決」と「協働解決」の学習時間の確保による成果と捉えられるとともに、更に資料の読み取りや文章と図表等結び付けて考えさせること等を授業の中で意図的に実践して、各教科の課題を向上させていく必要がある。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	A	チャレンジカップは一学期期末テスト前に実施できた。 一学期に際も定期テスト前に実施していく。 スタディサプリも学年によって配信方法は異なるが、少なくとも週に一回は配信できている。 ICTの活用に関しては、頻度を増やすことはできているため、より効果的な活用につながるよう継続していく。	変更なし
思考・判断・表現	B	評価の観点を示してから課題に取り組ませること、個に応じたアドバイスを行うことは意識して実践できている。しかし、「自力解決」と「協働解決」の時間確保は今後もより意識していく必要がある。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)